「静岡と戦争」～本土決戦態勢と県下の大空襲～

スライド本文・補足説明

◎ スライド No. １

「静岡と戦争」は、『静岡県史』『図説静岡県史』をもとに編集した歴史学習のＩＣＴ教材です。歴史文化情報センターが所蔵する貴重な写真資料等で構成し、各スライドには表題と出典が記されています。スライドの内容と関連事項は、この説明文をお読みください。

今日まで、あまり目に触れることのなかった「静岡の戦争に関する資料」をご覧いただき、「平和の尊さ」をこどもたちの心の中に育てていただきたいと思います。今回は県内の図書館や資料館の御協力をいただき作成しました。

「静岡と戦争」は、主に高等学校の生徒を対象としていますが、小学校・中学校の授業でもご利用いただけるスライドが数多く入っています。

また、授業中の発問に適する資料には、スライド説明文の最後に＊（編者註）をつけましたので、参考にしてください。

「静岡と戦争」を授業で使用される方は、直接歴史文化情報センターまでご連絡下さい。学校利用であれば、書換え可能な資料提供などをいたします。その他ご相談等は下記までご連絡ください。皆さまのご利用をお待ちしております。

歴史文化情報センター　電話　０５４－２２１－８２２８
メール　rekibun02☆tosyokan.pref.shizuoka.jp
（☆を＠に変更してお問い合わせ下さい）

◎スライド No. ２

「静岡と戦争」～本土決戦態勢と県下の大空襲～（スライド本文）

「静岡と戦争」は、1941（昭和 16）年の太平洋戦争勃発から 1945（昭和 20）年 8 月 15 日の終戦までを扱っています。主な内容は、戦時中県下に配置された軍事施設、空襲と艦砲射撃による被害状況、県内出身の戦死者数についてです。かつて静岡県も戦場であったことが理解できるスライドを掲載しました。

戦争の実相を感じていただき、「戦争と平和」について、子どもたちと一緒にお考えいただく一助となるよう、この資料を作成しました。

なお、本文中にある市町村名のうち、合併により市町村名が変更されている場合は、旧市町村名のまま表記しました。

今回の資料作成にあたり、貴重な資料の公開許諾をいただいた方々に、心よりお礼を申し上げます。

◎スライドNO．３

太平洋戦争開戦を伝える新聞記事
【1941（昭和16）年12月９日　静岡新聞　夕刊】

1941（昭和16）年、10月16日近衛内閣が総辞職し、かわって開戦を強く主張していた東条英機が10月18日後継内閣を組織した。

11月26日ハル米国務長官は、中国からの撤兵要求を含む「ハル＝ノート」を野村吉三郎駐米大使に渡し、日本側はこれを最後通牒と認め、12月１日の御前会議で規定方針通りに日米開戦を決定した。

12月８日、海軍の機動部隊はハワイの真珠湾アメリカ海軍基地を事前通告なしに空襲し、アメリカ艦隊主力の戦艦群を撃破した。

陸軍も通告なしでマレー半島へ奇襲上陸を行って戦争を開始した。そして計画通りに開戦後５ヵ月間で、フィリピン、インドネシア、マレー、ビルマにわたる東南アジア一帯を占領した。この緒戦の成功は、相手側の準備不足に乗じて得られたものであった。

緒戦を制した日本軍であったが、物量に勝る連合国軍の圧力が強まり、日本国内でも基地や軍需工場の設置が急ピッチで進んだ。以下は、静岡県内に設置された軍事施設である。

◎スライドNo．４

本土決戦態勢 － 県下の軍事施設（スライド本文）

静岡県下には、平時編成の常置部隊として歩兵第三十四連隊（静岡）をはじめ、歩兵第六十七連隊（浜松）、野戦重砲兵第二・第三連隊（三島）、高射砲第一連隊（浜松）などが配備されていた。

満州事変以後はとくに航空関係施設が増強された。浜松陸軍飛行学校、遠江射場などに次いで、太平洋戦争開戦後の1942（昭和17）年には、第一航空情報連隊（磐田）、航空航測第一連隊（浜松）、明野陸軍飛行学校天竜分教場（磐田）、海軍大井航空隊（榛原郡牧ノ原）が設けられた。さらに1944（昭和19）年には海軍藤枝航空隊や富士飛行場なども開設されている。

また、1945（昭和20）年には、アメリカ軍上陸地点の一つとして想定された静岡県下各地に本土決戦部隊が配置され、その兵員は58,800人以上に上る。他方、伊豆半島沿岸や清水市三保には、海軍特攻艇である「震洋」「海竜」の発進基地が設置されていた。

◎スライドNo. 5

本土決戦態勢 － 県下の軍事施設

本土決戦態勢下の軍用地と軍用施設

（戦争当時、県下では以下の軍事施設等が設置されました。）

●地図中の伊豆半島～東部地区

第12方面軍　　第84師団・第201師団・第81師団
　　独立混成第117旅団・独立混成第36連隊

●地図中の中部地区～西部地区

第13方面軍　　第143師団・第73師団・独立混成第120旅団
　　独立混成第97旅団・独立混成第119旅団・独立戦車第8旅団

●地図中の伊豆半島～中部地区（海上基地）

第15突撃隊基地　田子基地・安良里基地・土肥基地・戸田基地・江の浦基地
　　清水基地・御前崎基地

●番号はスライドの表に対応。

１．安倍川陸軍練兵場　２．静岡陸軍作業場　３．静岡陸軍射撃場
４．第24練成飛行隊（浜松陸軍北飛行場）
　・第1航測連隊各務原航空廠浜松分廠工員宿舎
５．浜松陸軍射撃場・高射砲隊照空陣地・浜松陸軍軍用水道給水場
６．三方原射撃場及飛行場・浜松陸軍演習廠舎・第7航空教育隊
７．陸軍第1技術研究所新津試験所　８．浜松陸軍演習廠舎
９．高射砲隊海岸射撃場　10．浜松陸軍飛行学校及浜松飛行場（南飛行場）
11．浜松飛行学校付属三角地帯　12．沼津海軍工廠　13．沼津海軍防空砲台
14．第2海軍技術廠音響兵器部下香貫本部　15．名古屋造兵廠駿河製造所
16．陸軍重砲兵学校三保分教場・清水海軍航空隊
17．横須賀海軍通信学校草薙実習所　18．三島陸軍射撃場
19.20.21.三島陸軍屯在部隊演習地　22．三島陸軍基地
23．陸軍少年戦車兵学校・西富士演習場及廠舎・陸軍少年戦車兵学校上水道
　陸軍少年戦車兵学校職員上井出宿舎・東海軍管区経理部大宮出張所
24．富士飛行場　25．第1航空情報連隊大藤演習場
26．第1航空情報連隊磐田小銃射撃場　27．富士裾野演習場
28．第1航空情報連隊神増原演習廠舎　29．二俣架橋演習倉庫
30．陸軍重砲兵学校富士分教所演習用地　31．三島陸軍屯在部隊演習地
32．海軍施設本部野外実験所・沼津海軍工作学校
33．三島陸軍練兵場・第2海軍技術廠下土狩事務所・三島陸軍屯在部隊演習地
34．藤枝海軍航空隊　35．遠江射場　36．御前崎防備隊　37．大井海軍航空隊

38. 第２海軍技術廠牛尾施設　39. 第１航空情報連隊横須賀廠舎
40. 第１航空情報連隊上浅羽演習場　41. 天竜陸軍飛行場
42. 第１航空情報連隊　43. 第１航空情報連隊上神増演習場
44. 浜名海浜団横須賀海軍施設部新居分遣隊及単独宿舎
＊農林省開拓局用地課「旧軍用地の実態調査」(1948 年カ※註)、戦史叢書 51『本土決戦準備』１付図等により作成。農林省調べの上掲資料は開拓可能地調査資料と思われる。このため市街地所在の軍用地等を含んでいないが、上記の土地面積の合計は約 11,200 町(ha)に上る。それは浜名湖面積の 1.6 倍に相当する。
※註　本文中のカは、「であろうか」という意味を表します。
【県史通史編６より補足説明・牧ノ原台地、軍用地として接収される】
　1940（昭和 15）年３月 26 日、牧之原小学校の台地上に土地を持つ約 260 人が集められた。海軍大佐の説明は簡単であった。５月から飛行場を建設する、用地内の家屋は移転、補償は追って知らせる……。２月から風向きを調べる男が見掛けられ、不審な気配を感じていた住民であったが、あまりに突然の伝達であった。用地の多くは茶畑であり、失ったら生活できない。陳情団は県庁や横須賀鎮守府に出向き、六郷村長石原喜一郎は横須賀だけでも 20 回足を運んだ。しかし、海軍は天皇の命令によるとしてこれを拒否した。牧ノ原台地の中心部はすっぽりと飛行場の中となり、わずか２か月で約 140 戸が移転した。海軍大井飛行場の誕生である。示された買収額は市価の約 60%で軍事国債の受け取りが奨励され、それは戦後紙くず同然となった。

◎スライド No. 6

海底から引き揚げられた「海竜」　【熱海市立図書館所蔵資料】
　1978（昭和 53）年、熱海市網代（あじろ）の沖合で「海竜」の引き揚げ作業が行われた。「海竜」は２発の魚雷を搭載した２人乗りの特殊潜航艇。県下には横須賀鎮守府所属第１特攻戦隊に属する第 15・16 突撃隊が配置され、「海竜」「震洋」のほか「回天」「蛟竜」などの特攻艇が配備される計画があった。
【海軍特攻艇】
　敵艦船へ体当たり攻撃する特攻作戦は、軍中央が組織として正式に採用し実施した正規の戦法であった。海軍では、1944（昭和 19）年２月に呉海軍工廠魚雷実験部に人間魚雷（のちの「回天」）の試作を指示している。
　特攻兵器の開発に拍車がかかったのは、1944 年７月米軍によってサイパン島が陥落し、日本の敗色が濃くなった頃である。
　大本営は本土決戦を想定し、米軍を洋上で撃滅するための戦力として、８月末には早くも兵器として採用された。

【県史通史編６より補足説明・「回天特攻隊員の遺書に類する手紙」】
　静岡高等学校文乙の 17 回生で、東京帝国大学経済学部在学中に学徒出陣し、回天特攻隊に所属することになった亥角（いすみ）泰彦は、出撃の早暁に母親に送った「遺書に類する」手紙で、自分の死生観や今為すべきことについて、こう書き残している。
　「私は軍隊に入る頃から死ぬことは何でもないと、馬鹿のやうに言ってをりました。事実さうであったようです。併し生命何ぞ惜しむに足らんと常々吹聴していなくてはならなかったというのは、やはり「生死」といふものに非常なこだわりをもつことをあらはすものです。事実私は生死を超越したといひながら、つい先頃まで死生感といふ問題が頭の中から離れたことはありませんでした。
　それは私の仕事の性質上殊（こと）に仕方のないことだったかも知れませんでした。自分のなすべきことは判っている、しかもそれに対する訓練は受けていない、さういった頃（去年の終 3 ケ月間）の私には如何（いか）にして我々の死を価値づけるか、我々は何に生命を捧げるのか、何やかやと思ひ惑ったものです。しかし愈々（いよいよ）訓練を始めてからといふもの、私は死といふことを少しも考へぬやうになりました。誰の為に死ぬとか、それでは犬死になりはせぬかとか、そんなこと総てが頭の中から消えてしまひました。又考へる必要がなくなったのです。自分のなすべき仕事―これは決して我等何をなすべきか、といふ道徳的な命題の意味でもなく、又所謂（いわゆる）軍人としての職責とかいったやうな重苦しいものでもなく、唯（ただ）「さあこれから寝ようか」と言ったやうな極く軽い、気楽な意味の「仕事」なのですが―を唯（ただ）淡々としてやってゆく。私の今の死生感はこれにつきています。死生感といふ言葉には一寸（ちょっと）不適切な表現ですが、唯あるがままに最善を生きて行け、さうすれば死も生もすべてがうまくゆくのだ。」

◎スライド No. 7

「トーチカ」浜松市東区半田町に残る防御施設
　トーチカとはロシア語で「点」という意味である。1945（昭和 20）年に入ると、アメリカ軍の日本本土上陸は避けられないとして、浜松でも陸軍の教範（テキスト）に「鉄筋コンクリート造掩蓋掩体（えんがいえんたい）」と記された「トーチカ」を設置した。砲撃・爆撃に耐え、中に兵士が潜んで開いた銃丸から敵を迎え撃つ防御施設である。
　この一帯は舟岡山とよばれ、ここから三方原へとのぼる坂を滝坂といい、この滝坂の先にできたのが陸軍の三方原飛行場だった。この舟岡山は三方原への東からの進入口であり、このトーチカは飛行場防衛のため、1945（昭和 20）年

ごろ構築されたと考えられる。
　現在、桜井製作所の南にある法源堂西方に保存されている。道路工事に伴い現地に移動されたが、当時の原型を保っている。

◎スライド No. 8

大空襲・艦砲射撃　1945 年　夏（スライド本文）
　静岡県下各地の空襲は、1944（昭和 19）年に始まり、敗戦まで続いた。空襲回数は数百回に上り、爆弾一万発以上、焼夷弾二十万発以上が県民の頭上に降り注がれた。その被害は調査報告書によりことなるが、戦後の経済安定部の調べによると、死者 6,473 人、重軽症者 9,818 人、被害家屋 93,958 戸である。静岡県が調べた 1944 年 11 月 5 日から 1945 年 7 月 17 日の戦争の罹災者数 341,819 人は、200 万県民の約 6 分の 1 にあたる。
　1945（昭和 20）年 4 月以降軍需工場を目標に本格化した空襲は、浜松市を中心に大きな被害を与えた。
　東京・大阪など大都市空襲を終えた 6 月、地方中都市に対する無差別爆撃が開始された。浜松市（6 月 18 日）、静岡市（6 月 20 日）、清水市（7 月 7 日）、沼津市（7 月 17 日）が相次いで一夜にして焼け野原となった。 7 月 29 日夜、浜松市と新居町が艦砲射撃を受け、31 日には清水市も襲撃された。海からの攻撃も始まったのである。

◎スライド No. 9

静岡県下の大空襲　1945 年　夏　空襲と艦砲射撃の被害

【下田】	死者・行方不明者 90 余人	重軽傷者多数	家屋被害約 100 戸
【稲取】	死者・行方不明者 49 人	重軽傷者 38 人	家屋被害約 189 戸
【沼津】	死者・行方不明者 324 人	重軽傷者 631 人	家屋被害約 12,218 戸
【清水】	死者・行方不明者 360 人	重軽傷者 445 人	家屋被害約 8,689 戸
【静岡】	死者・行方不明者 2,010 人	重軽傷者 6,682 人	家屋被害約 31,032 戸
【島田】	死者・行方不明者 35 人	重軽傷者 150 余人	家屋被害 400 戸以上
【浜松】	死者・行方不明者 3,609 人	重軽傷者 3,220 人	家屋被害約 32,454 戸

＊静岡平和資料館の設立をすすめる市民の会編『ドキュメント静岡の空襲』
　より作成した。
【県史通史編 6 より補足説明・空襲と艦砲射撃の被害】
　1944（昭和 19）年 11 月単機で姿を見せたＢ29 が、やがて編隊を組んで定期便のように県下を通過または爆撃するようになった。
　県民は空襲に対する心構えとして逃げずに消火活動に当たることになっており、焼夷弾はたたき消し、火災はバケツリレーで消し止めるという防空訓練が

頻繁に行われた。家屋は焼夷弾が屋根裏で火を吹かないように天井板が外され、庭には消火活動に移るまでの待避用として防空壕を設けるものとされた。

米軍は消火活動を妨げるために、爆風効果の大きい焼夷弾を浜松、静岡、清水では１万発以上、沼津では 5,700 発以上を投下した。主要な投下物である焼夷弾は集束焼夷弾であり、48 個（36 個という説もある）ないし 110 個の焼夷弾を束にしたものが空中で分解して、雨のように降り注ぐ仕掛けになっていた。この一つひとつを数えれば、市民の数よりも多いことになる。生き残っても消火活動など全く不可能であった。

浜松では、市民は持ち場を守ろうとして推定 2,900 人から 3,500 人の死者を出して市街は焼失し、消火活動の不可能なことを証明したが、その教訓は次の静岡には生かされず、静岡でも同様に推定 1,700 人から 2,000 人の死者を出した。それでも清水の死者が推定 350 人にとどまったのは、隣接市静岡の惨状を目の当たりにし、逃げることを重視したからである。沼津も推定 268 人から 318 人の死者を出した（死者数は大空襲以外を含む各都市の推定総計）。

空襲は予想をはるかに超える惨状をつくり出した。焼夷弾の油脂はガソリンがまかれたと思うほど降り掛かり、アスファルトも水面も燃えた。頼みの防空壕にとどまれば窒息死が待っていた。中小都市の空襲は、県民の抗戦意志を着実に砕いていった。

◎スライド No. 10

浜松艦砲射撃　1945 年 7 月 29 日【中日新聞社所蔵資料】

アメリカで発見された浜松艦砲射撃を紹介する記事。1981（昭和 56）年 7 月 29・30 日付『中日新聞・東海本社版』に掲載。

【県史通史編６より補足説明・艦砲射撃】

浜松は７月 29 日から 30 日未明にかけて、日本楽器・国鉄工機部を主目標に戦艦３、巡洋艦４、駆逐艦 10 から成る第三十四攻撃部隊と英国部隊から、少なくとも 1,917 発の艦砲射撃を約１時間にわたって受けた。

【艦砲射撃の使用砲弾と発射数】・『浜松大空襲　戦争はいらない』247 頁より

・サウスダコタ	（戦艦）	40 ㎝大容量弾 270 発＊
		12.5 ㎝対空普通弾 72 発
・マサチューセッツ	（戦艦）	40 ㎝大容量弾 270 発
・インディアナ	（戦艦）	40 ㎝大容量弾 270 発
・シカゴ	（巡洋艦）	20 ㎝大容量弾 270 発
・クインシー	（巡洋艦）	20 ㎝大容量弾 270 発
・ボストン	（巡洋艦）	20 ㎝大容量弾 225 発
・セントポール	（巡洋艦）	20 ㎝大容量弾 270 発

・キングジョージ５世（英国戦艦）参加するも発射数記録なし
＊大容量弾は、非装甲の地上攻撃、陸軍施設、人員などの攻撃に使用され、内部に大量の炸薬を装填できる。対空普通弾は対空弾の性質を持つが性能は同じ。
【樹海文庫『空襲体験の記録』藤田弘氏の手記より】
　昭和 20 年 7 月 29 日、20 時 30 分頃、警報の発令もなしに単発の偵察機らしい一機が飛んできた。地上は灯火管制で暗く、満天は月の明かりでよく見える。敵機は上空を旋回しはじめた。長いこと左旋回を繰り返した挙句、目もまばゆい照明弾を投下した。開いた落下傘が地上に落ちるまで、辺りは真昼のように明るかった。照明弾は次々と落とされた。
　月は中天にある。時刻は今、23 時 23 分。不意に南の遠州灘で夜空に閃光が走った。遥かの海上に地軸をゆるがすグワーンという轟音が湧き起こった。ヒューッという唸りが頭上を過ぎたのは轟音とほとんど同じだった。しばらくしてグワーンと轟（とどろ）くものすごい音と共にピピピーと戸障子が揺れ動いた。
　日本近海域の制海権を奪い取り、遠州灘沖合に集結したアメリカの戦艦群 8 隻は、砲列を敷き、至近距離から間断なく艦砲射撃を浴びせるのであった。

◎スライド No. 11

清水の艦砲射撃　すさまじい閃光を見た　鈴木富夫
【静岡平和資料センター所蔵資料】
（池上広治さん当時 12 歳の体験談）
　７月７日の大空襲で焼け出されてバラックにいた兄と私は、７月 31 日夜、艦砲射撃を見た。はるか沖の方から、すさまじい閃光が幾重にも重なり、美濃輪方面に向かって走った。
（渡辺晴朗さん　当時 12 歳の体験談）
　７月 31 日夜、それまで聞いたことのない凄い連続音にとび起きた。怖かった。家から 50 メートルほど離れた防空壕まで夢中で走った。その一瞬の間に、頭上を水平に飛ぶ無数の砲弾－曳光弾の赤・青・黄などの飛跡を見た。

◎スライド No. 12

警報告知板【静岡平和資料センター所蔵資料】
　「空襲警報発令中」銭座町町内会とある。B 29 をはじめ、米軍機が日本列島を攻撃する際に静岡は通り道となり、その都度警報は出され、その度に人々は防空壕へ避難した。
　静岡地区では 1944（昭和 19）年 11 月 1 日～1945（昭和 20）年 8 月 15 日の間に警戒警報 467 回、空襲警報 108 回が発令された。
註　『村瀬隆彦著　藤枝市史研究　第十一号』

※ 警戒警報及び空襲警報の回数は、村瀬隆彦氏の教示による。
「藤枝防空監視哨資料による警戒警報・空襲警報発令・解除一覧」より

◎スライド No. 13

「烈しくなる空襲」昭和 20（1945）年４月 19 日【佐々木古櫻 戦中画日記 ６】
<画中に記されている文字>

●空襲が烈しい。十三日夜と十五日夜、帝都を襲った敵機は各所を盲爆した。大森・蒲田・川崎・鶴見・横浜と、京浜地区を焼野原にした。板橋から王子方面も同様だ。林一家は十三日の夜全焼して、十九日やっと沼津へたどり付（着）いた。しかし悲観はして居らぬ。（上段右）

●大森も王子も焼けたことと思ふが、今以て何んの便りもない。早や一週間にもなるが、安否が知りたいが、行く事は出来ない。犬死する様な弟等ではないが、さぞ困って居ることと思ふと矢も楯もたまらなくなるが致し方がない。運命だ。（上段左）

●静に神に祈って、無事を願うばかりである。四月十九日記（左下）

◎スライド No. 14

「沼津大空襲」 昭和 20(1945）年７月 17 日」 【佐々木古櫻 戦中画日記 ９】
<画中に記されている文字>

●今はこれまで、身をもってのかれん（逃れん）と、一家五人はそれぞれ布団をかぶりて火の中をくくり抜けくくり抜けて松林の中にかけ入りる。後も前も人の波、猛火は天を覆ひ、爆弾の破裂する音、身の間辺に落下する焼夷弾、いづこにのかれん（逃れん）と松林を切り抜け、磯の波打ちぎはにまで出ず。昔、平家の一の谷の落人もかくありしかと思はる。（上段右）

●片浜・静浦方面も早や火の海にて、敵機は頭上より投弾し、或いは海中に水煙を上げ、磯辺近くに落下するもの、松林に落ちる（もの）。小船・網小屋も火に包まれ危期（危機）せまる。又も松林に引き返さんとする時、危機一発（髪）、至近弾は身辺二尺の周辺に落下し、約二間の所に直撃弾をうけ倒れる女あり。急ぎ其場をのがれて、松の大木の根元に身を寄す。（上段右中）

●身近の網小屋は火を発し、俄におこる烈風の為、火は我々の頭上にせまる。布団に飛び散る火の子（粉）を払ひ払ひ、息苦しき熱風、避ける場所も見当らず、風の方行（向）の変るにまかせて、只だ只だ運命なりと、ここに一時を送りぬ。（上段左中）

●爆弾・焼夷弾は雨霞（雲霞）の如く落下し、此世の地極（獄）ともいふべきか。市の方は猛火に包まれ、焼け落ちる音、爆弾の響、ゴウゴウとして昼よりも明るく、東海風好（光）第一の沼津市は、此の様にしてわずか二、三時

間に全く一望火の海と化し、全市一変して焼野原となる。敵の爆弾下、市民の敢闘も空しく、遂に予期せる如くのこの有様、戦局は身辺にせまることを痛感せり。
立てよ、市民。（上段左）
●戦はこれからだ。これに打ち勝ってこそ、最後の勝利を得られるのである。総てを捨てこれから生るのである。（下段）

◎スライド No. 15

「沼津大空襲後　焼け野原となる」【佐々木古櫻　戦中画日記９】
<画中に記されている文字>
●昨日は人の身に同情して居ったものが、一夜にして我身にかかるとは、神ならぬ、知る由もなし。安住を願って居ったのでないが、してやられただけに残念である。（右上）
●家も焼けた。預けた荷物も、倉が焼け落ちたので駄目。畑に出したものも総て焼けてしまった。一家の者は着のみ着のまま。残ったものは、かぶって出た布団が一枚づつ。運命である。致し方もない。焼跡に立って感無量である。（中段右）
●三十五年の画家生活、二十五年の沼津永住、終生の地も遂に焼野原と化した。今は追憶して、昔の思出が頭の中をかけ廻って居る。然し、己は強かった。たしかに勝ったのだ。Ｂ助が来るまでに大神の御前に必勝祈願の画をお納めした。（中段真中）
●総てを焼きつくされたが、魂までは焼（か）れない。画筆は捨てた。これからかたきを打って見せる。皇国は我々の祖先の地だ。大和魂は物量で破れるものか。（左上）
●大地を踏みしめ、これから再起するのだ。（右下）
＊（編者註）スライド No. 13・14・15 から、いよいよ空襲が激しくなり、国民の財産・生命・戦意を奪っていく様子が分かります。空襲の貴重な体験談です。

◎スライド No. 16

沼津大空襲 1945 年 7 月 17 日【沼津市明治史料館所蔵資料】
1945（昭和 20）年 7 月 17 日未明、Ｂ29 第 58 航空団 128 機が焼夷弾 9,077 発、爆弾 7 発を投下、全市の 85%が焼失、この空襲による死者 268 人から 318 人（推計）であり、全焼 11,605 棟、半焼 197 棟という損害であった。
写真正面の建物は左から沼津商工会議所、駿河銀行大手町支店、沼津郵便局。
【沼津大空襲】
沼津市の中心街にあった第一国民学校の校務日誌には、「児童罹災者ハ、１、

２名ヲ除ク以外全員ナリ」とあり、アメリカ側のデータでは、目標市街面積の89.5%を破壊したとある。

スライド N0.14 では、佐々木古櫻氏一家の空襲体験が伝えられている。この日、波打ち際に逃れた人々には機銃掃射が行われ、海面は真っ赤に染まったと証言する体験者もいる。直撃弾で手や足を失った人々も少なくなかった。多くの市民が逃げ込んだ海岸にも容赦なく爆弾が降り注がれたことは、幹に焼夷弾が突き刺さったままの松の木が現存していたことからも証明される。

被害は市内だけでなく、隣接する駿東郡愛鷹村（戦後沼津市に合併）の東椎路(ひがししいじ)区にもあった。18 戸が焼失、13 世帯の罹災者が出た。同区では、戦争の記憶を後世に伝えるべく、1984（昭和 59）年区内字久保の不動堂に戦災記念碑を建て、「当久保地区モ沢田地区ニ高射砲陣地ガ有リシ為カ下記十八戸ノ家屋ガ焼夷弾ニヨリ焼失スル」云々と刻んだ。

◎スライド No.17

浜松　空中戦でＢ29 撃墜【浜松市立中央図書館所蔵資料】

昭和 20 年 1 月 23 日　晴　西風あり

13 時 30 分頃警戒警報発令、14 時頃空襲警報に変わる。Ｂ29 の数編隊が紀伊半島より侵入して北進、阪神・京都付近上空を通過後、名古屋に侵入。同地を攻撃したあと浜松上空を通過して脱去。

図は浜松上空における空中戦で、日本軍の飛行機に撃墜されるＢ29。時刻は 15 時 30 分頃である。

◎スライド No.18

浜松　敵機来襲【浜松市立中央図書館所蔵資料】

昭和 20 年 2 月 16 日　晴　午前 8 時頃突如空襲警報が鳴る。

上図は浜松南方を西進する敵艦上機。中図は浜松飛行場を攻撃中の敵艦上機。下図は浜松上空の敵艦上機。

【空襲体験】

戦時中浜松市に住んでいた清野泰子（旧姓小林）氏が、『わたしのえにっき　戦時下の浜松にて』という自費出版の絵日記を残している。

清野泰子氏は 1937（昭和 12）年長野県伊那市に生まれ、1944（昭和 19）年の春、父親が静岡第二師範学校に勤務することになり、浜松へ一家転住した。戦時中の浜松での生活は、幼い少女の胸に忘れることのできない思い出を残した。「青い空に編隊を組んで銀色の翼をひろげ飛んで行ったＢ29 の姿や白く長い飛行機雲。忘れられない不気味な空襲警報のサイレン。丘の上から見た真っ赤に燃えていた町の中心部の有様。グラマンの機銃掃射にあって母とお茶畑に逃げ

込んだこと（母は青い目のパイロットと目があったといっておりました）。戦争中には大きく報道されなかった大地震（東南海地震）が起こり、寒い野原で一晩野宿したこともありました」とまえがきの部分にある。当時、父親が勤労動員で不在であり、心細い不安な少女の気持ちが、この「えにっき」から伝わる。そのほかの原画にも、青い空を背景にＢ29 が飛来する様子が数多く描かれている。

◎スライド No. 19

「浜松　楊子橋（ようずばし）に残る弾痕」【歴史文化情報センター所蔵資料】

浜松駅南方には、浅野重工や河合楽器などの軍需工場が多数あり、空爆の対象となった。馬込川に架かる楊子橋（ようずばし）には機銃とみられる弾痕が橋の側面全体に残されている。戦時中の攻撃の生々しさを今に伝えている。

◎スライド No. 20

浜松空襲　炎上する浜松市街【浜松市立中央図書館所蔵資料】

昭和 20 年 6 月 18 日

Ｂ29 の焼夷弾攻撃により炎上する浜松市。この日投下された焼夷弾は 65,000 発、死者 1,157 人、住家の全焼 15,560 戸、浜松の空襲史上最大の被害を出した。中心部は実に焦熱地獄と化した。

絵は、東海道本線天竜川鉄道橋の西から見た浜松の上空である。

「その当時、大浦町にあったＮＨＫ浜松放送局の電波アンテナの塔を描き忘れている。絵の左手日本楽器天竜工場の煙突 2 本の右手、松の木と重なるあたりか少し右に日本楽器の煙突と同じ位の大きさで 2 本の電波アンテナの塔が見えていた。あまりに火勢が強く、真っ赤な炎ばかりが鮮明に焼き付いて、その中にくっきりと見えていたはずの鉄塔を何で書き忘れたか定かではない」と、作者の鈴木健市氏は語っている。

（スライド No. 17、18、20 はすべて鈴木健市氏のスケッチである。）

◎スライド NO. 21

戦災後の浜松中心部【浜松復興記念館所蔵資料】

昭和 20 年 6 月 18 日の「浜松大空襲」や 7 月 29 日の「艦砲射撃」により浜松の街は廃墟と化した。この写真は昭和 20 年に広小路の新川の端（現在の遠州鉄道「第一通り駅」付近）から旧松菱百貨店方面（現在のザザシティ方面）を撮影したものである。

【浜松大空襲】・『静岡県の戦争遺跡を歩く』29 頁～36 頁参照

浜松地域は戦争末期に激しい空襲を受けたが、それは三方ヶ原台地上に陸軍

爆撃隊の基地があり、市内には軍需生産を担う工場群があったからである。米軍の爆撃用資料には、攻撃目標として日本楽器、中島飛行機、鈴木織機、国鉄工機部などの軍需工場や浜松・三方原の飛行場などの軍事基地があげられている。また、空襲の記録には、当時の状況が次のように記されている。
「尾張の公衆防空壕で 30 余人が窒息・焼死、野口では母親が赤ん坊を抱え道端で焼死した。元目町角の防火用水には頭から半身を水に入れたまま母親が死亡、近くには子ども 4 人が間隔を置いて倒れていた。鴨江（かもえ）では壕近くに着弾、女性たちの下半身が埋まり焼死した。新町の防空壕では一家 5 人が蒸し焼き状態で死亡した。馬込川からは悶え苦しむ人々の異様な声が響いた」とあり、市街地は一夜にして廃墟になった。大空襲の後、戦災で家を失った者、疎開先を求めて移住する者などのために、浜松市の人口は 1944（昭和 19）年の 187,433 人が終戦時には 81,437 人に急減した。

◎スライド No.22

投下された焼夷弾の残骸【静岡平和資料センター所蔵資料】

1945（昭和 20）年 6 月 20 日の静岡空襲では、M47 焼夷弾 336 トンとM69 焼夷弾 453 トンが投下された。米軍の攻撃時間は 20 日午前 0 時 51 分から午前 2 時 54 分までＢ29 機が来襲し、焼夷弾を投下して去った。

爆弾や砲弾は着弾時に破裂して損害を与えるが、焼夷弾は建物などに火災を発生させることを目的としていた。油脂焼夷弾・黄燐焼夷弾・エレクトロン焼夷弾の 3 種類があり、昭和 20 年の空襲では油脂焼夷弾が主に使用された。

静岡空襲では、M19 収束焼夷弾が使用された。1 発 2.7kg のM69 油脂焼夷弾を 38 本束ねたものをM19 収束焼夷弾という。M69 の単体焼夷弾は六角柱状の鉄鋼の筒に、ナフサネートとパーム油を混合したゼリー状のナパームを詰めたものである。投下後に、高度数百メートルでベルトが外れ、38 本のM69 が落下する。尾部から麻布のリボンが飛び出し、火がついて落下する様は、しかけ花火のようだったという。リボンは日本家屋用に落下速度を抑え、貫通力を弱めるための工夫だった。

スライド左手前は単体焼夷弾M69、左奥・右奥は静岡に投下された収束焼夷弾M19 の尾部、右手前はM19 の頭部である。焼夷弾の投下の様子については、スライド No.24 を参照。

＊（編者註）埼玉県平和資料館には、M19 の模型が常設展示されています。

◎スライド N0.23

Ｂ29 跳梁　遠藤龍彦（当時 14 歳　東草深）【静岡平和資料センター所蔵資料】

6 月 19 日深夜から 20 日の明け方にかけて、Ｂ29 は繰り返し襲いかかった。

街は火の海となり、炎に映えて、Ｂ29 の巨大な翼は悪魔のように輝いた。

◎スライド NO. 24

束になって落ちる焼夷弾　滝　正臣（当時８歳　秋山町）
【静岡平和資料センター所蔵資料】
　安倍川の堤防から見ていると、銀色に輝くＢ29 の巨体から、焼夷弾が束になって、次から次へと投下されていく。当時８才の私には強烈な印象だった。ガソリンが燃えるような強い臭いがした。

◎スライド NO. 25

静岡が燃える　久保田光亭　（当時 45 歳　両替町）
【静岡平和資料センター所蔵資料】
　市の中心であり、街のシンボルであった駿府城址も、市役所のドームも警察の望楼も炎々と猛火に包まれて燃える。静岡が燃える。

◎スライド NO. 26

「逃げまどう」　芹沢きよ　（当時 22 歳　北番町）
【静岡平和資料センター所蔵資料】
　逃げ込んだ防空壕の中にも火がついた。７か月の乳飲み子を抱いた母を先頭に、私は幼い弟を背負って、燃えさかる炎の中におどり出た。他の壕まで走る間に弟の防空頭巾は燃えてしまった。同じ時刻、別の所で他の弟と妹は焼け死んでいた。
【静岡大空襲】・『静岡県の戦争遺跡を歩く』85 頁参照
　当時教師をしていた小長谷澄子さんの手記より
　「油くさい風であった。砂と火の混じった風の渦であった。……既に行く手は火の海であった……逃げ遅れた人々は、めくるめくような火の明るさに取り囲まれて進みもならず、銀行の前あたりで右往左往するばかりであった。鼻の穴も、のどの奥も、まぶたの奥の僅かな湿りまでからからに乾上り、火の風に叩きつけられて、私は道路ぞいの無蓋の防空壕へころげ落ちた。仰向けになった顔の上を炎が舞った……殴りつけられたような衝撃であった……」と当日の空襲の凄まじさを記している。
＊（編者註）静岡空襲の体験を語る「語り部」の方が年々少なくなっています。当時の様子を生の声で聞くのは、こどもたちにとても貴重な体験となります

◎スライド No. 27

静岡大空襲 1945 年 6 月 20 日【個人所蔵資料】

1945（昭和 20）年 6 月 20 日未明、B29 第 314 航空団 137 機が焼夷弾 13,211 発、爆弾 51 発を投下、静岡全市の 66%が焼失した。静岡市の空襲による死者は 1,800～1,900 人、約 12 万人が罹災した。

【静岡大空襲】・『静岡県の戦争遺跡を歩く』89 頁～92 頁参照

米軍は呉服町通りと本通りの交差点を爆撃中心点とし、同点を狙って焼夷弾を投下、半径 1.2 ㎞の円内に半量が着弾すれば静岡は壊滅と考えた。

交差点の一角に静岡銀行本店が建っている。1931（昭和６）年竣工、爆撃に耐えた重厚な建物は今も健在である。静岡市役所と同様、浜松市出身の著名な建築家・中村與資平（よしへい）氏の設計である。ここから近い屋形町にあった静岡市立静岡病院の看護婦６人は炎の中で焼死した。彼女らを偲ぶ慰霊碑が現在は追手町にある病院の敷地内に建てられ、毎年慰霊祭が行われている。

激しい火災はいたるところでつむじ風を呼び、布団やトタン、人までも吹き上げた。火の粉の風に押し戻されながら人々は安倍川に逃げた。早期に安倍川までたどり着いた人々は橋を渡ったが、しだいに橋は混乱し、警防団に阻止された人々も多い。

安倍川餅「石部や」の娘さんの寿代さんは、「家の周りは逃げて来た人でごった返し、荷車や乳母車、泣き声や怒声が黒い山となって安倍川橋をめざした。土手への道も数珠つなぎ……翌日から隣の空き地には街から焼死体が運ばれ、一列に丸太のように並べられた。数は日に日に増し、隅から 1 体ずつ荼毘にふされた……」と空襲翌日の惨状を伝えている。

◎スライド No. 28

【焼け残った不去来庵】・『静岡県の戦争遺跡を歩く』93 頁～96 頁参照

焼け残った不去来庵【歴史文化情報センター所蔵資料】

（左）不去来庵（持仏堂）

静岡市葵区本通り 1 丁目の静岡銀行本店の南隣に、木々に囲まれた「遍界山不去来庵（へんかいざんふきょらいあん）」本堂がある。通称「伊伝」の屋号で知られる渡邉家の先祖が、光格（こうかく）天皇の御念持仏であった「阿弥陀如来尊蔵」を祀るために三代に渡り築いた由緒ある持仏堂である。

1915（大正 4）年に落成したこのお堂は、間口四間半・奥行五間半の土蔵造りで、屋根は三河産三州瓦に重葺きの寄せ棟造り、正面の扉には森田鶴堂（かくどう）の漆喰（しっくい）彫刻（鏝絵＝こてえ）「金剛慎力菩薩像（こんごうしんりきぼさつぞう）」が施されている。

本堂は石積みの基壇上に建ち、外壁の腰部は伊豆石、上部壁は漆喰塗りで頻発した火災に備えた土蔵形式である。伊伝財団理事長渡邉朗さんによると、伊豆石の器に粘土を貯えておき、火災時に扉の隙間に目張りをしたといい、静岡空襲の時にも目張りをしてから非難したと伝えられている。

静岡空襲の爆撃中心点に隣接しながら、耐え間なく空から襲う焼夷弾と激しく渦巻く火炎に耐え、奇跡的に焼失を免れた建造物である。2000 年には登録有形文化財に登録された。

（右）阿弥陀如来の涙（持仏堂北壁）【歴史文化情報センター所蔵資料】

不去来庵堂内の阿弥陀如来像や彩色豊かな天井画、東向きの向拝の彫刻などは焼失を免れ、建立当時の面影をそのまま残している。

本堂北・西・南面の伊豆石の表面には黒い筋が認められる。この筋は、北側の壁面に最も顕著である。これは空襲の痕跡である。伊豆石の中の礫状の黒い物質が火炎で熱せられ、融点を超え溶けて流れ出したものである。空襲の惨状に耐えかねて流された「阿弥陀如来の涙」と称される。

この黒い物質は、顕微鏡観察とＸ線回折の結果、硫黄であることが分かった。単斜硫黄は約 120℃で溶け始めて液体となるが、約 160℃になると粘度を増す。建造時に伊豆石の凹部に充填された硫黄は、激しく渦巻く火災の中で、120℃で溶け始め、160℃までの間に一気に流れ落ちたものと考えられる。黒筋のある三方の壁面は屋敷などに囲まれ熱せられた。一方東向きの向拝は庭に面し、庭木や煉瓦の塀が防火壁となり焼失を免れたと思われる。静岡空襲の降り注ぐ焼夷弾と炎の嵐のなかで焼け残った不去来庵は、戦争を現代に伝える奇跡の建造物である。

◎スライド No. 29

復興のシンボルツリー

（左）静岡市「日赤病院前クスノキ」　【歴史文化情報センター所蔵資料】

（右）浜松駅前「プラタナスの木」　【歴史文化情報センター所蔵資料】

静岡市には、日赤病院入口前の歩道に 1 本のクスノキが茂っており、幹に深くえぐられた割れ目が見える。これは空襲で焼かれた傷跡である。この木について戦後 50 年の 8 月 15 日付静岡新聞に「空襲から 3 年位のある日、消し炭になったクスノキのてっぺんに若緑の芽を見つけ、生きる勇気をもらった」との投書が掲載された。

浜松では、浜松駅から鍛冶町に通じる「御幸通り」に初めての街路樹として 1929（昭和 4）年に 46 本のプラタナスが植えられ、市民に親しまれていた。しかし 1945（昭和 20）年 6 月 18 日の大空襲により、浜松の市街地の大半が焦土と化した中で奇跡的に 3 本のプラタナスが生き残った。

3 本のうち、特にみずほ銀行の南側にあった木が早くから「市民の木」と注目されてきたが、この木の近くに戦前に植えられたプラタナスが 2 本残っていた。この 3 本のプラタナスを、「初代」「2 代目」「3 代目」と区別して呼び、現在でも浜松市緑化推進センター、遠鉄百貨店東側、浜松城公園にそれぞれ移植された。

これらの木々は、戦争で被災した人々の心を慰め、現在でも戦後復興のシンボルとして大切に保存されている。

◎スライド No. 30

ポツダム宣言受諾を伝える記事【1945 年 8 月 16 日付　静岡新聞】

ポツダム宣言はアメリカの提案によるもので、戦争完遂の決意を述べ、またこの宣言以外には条件はないとして日本の降伏を要求したものである。内容は日本軍への無条件降伏勧告と日本の戦後処理方針の 13 項目から成り立っている。

当時敗勢にあった日本政府・日本軍首脳部の側では、この宣言を受諾すべきか否かをめぐって激しい議論がたたかわされたが、7 月 28 日、当時の鈴木貫太郎内閣はこの宣言を黙殺すると発表した。そのため、8 月 6 日原子爆弾の広島投下、8 日のソ連の対日参戦、9 日の長崎への原子爆弾投下と事態は深刻化した。10 日には日本政府は天皇制の維持という条件付きでポツダム宣言を受諾すると通告した。これに対して連合国は、バーンズ米国務長官の名で、「天皇及び日本政府の国を統治する権限は連合国最高司令官に従属する、究極の政治形態は日本国民が自由に表明した意思によって決定される」と回答した。

8 月 14 日ポツダム宣言の受諾を決定し、詔書が作られた。詔書は 15 日正午、天皇のラジオ放送によって日本国民と軍隊に伝えられた。ポツダム宣言には「軍隊の降伏」という文言がないところから、「日本国政府の降伏ではない」という疑問も生じるが、アメリカ国務省は、バーンズ回答文は無条件降伏であることを確認している。9 月 2 日、米軍艦ミズーリの艦上で降伏文書の調印式が行われた。

◎スライド No. 31

十五年戦争の犠牲者　静岡県出身兵士の戦没地と戦死者数

1931 年から 1945 年の敗戦に至る「十五年戦争」の間、県下の若者たちが戦争に駆り出され、半地球大の広範な地域の戦場に送り込まれた。その数は正確には分からないが、20 数万人に上るといわれる。そして多くの人々が亡くなった。静岡県護国神社合祀者数は、72,653 人に上る。

戦後の静岡県民生部老人援護課の調べによると、軍人・軍属・準軍属の「戦没者」は 75,791 人に上る。これは軍籍にあった者だけの数字だから、他の一般

民間人の犠牲者を加えれば、8 万人を下ることはないだろう。日本全体では 310 万人以上と推定されている。

●スライドにある静岡県出身兵士の戦没地と戦死者数

旧ソ連本土 1,510 人、モンゴル 253 人、旧満州 2,255 人、北朝鮮 270 人、韓国 235 人、中国本土 16,571 人、インド・ビルマ 2,757 人、旧仏領インドシナ 153 人、シンガポール・タイ・マレー326 人、ボルネオ 798 人、西イリアン 1,361 人、インドネシア（西イリアンを除く）926 人、フィリピン 14,555 人、東部ニューギニア・ソロモン 7,302 人、中部太平洋 9,260 人、樺太・千島・アリューシャン 226 人、内地 7,965 人、硫黄島 463 人、沖縄 1,607 人、台湾 901 人、その他 6,097 人。

静岡県民生部老人援護課『援護の手びき』より作成。死者数の合計は 75,791 人。内地には「在郷死」（戦地から帰還しての死亡）を含む。

◎スライド No. 32

菊川地域の戦争における犠牲者　『菊川町史』近現代通史編 946 頁～951 頁参照

【菊川町史説明・菊川地域の戦争被害者】

旧菊川町（現菊川市）の戦争による犠牲の実態を、菊川町遺族会『菊川町遺芳録―平和の礎』（1979 年 4 月）より検証する。

まず、菊川町全域の戦（病）死者合計は 737 名で、1940（昭和 15）年国勢調査人口のうち男子 9,528 名中 7.7%、世帯数比 21.5%、つまり 5 世帯に 1 人の犠牲者である。この 5 戸に 1 人の犠牲という数値は、著者（静岡大学名誉教授・山本義彦氏）が『袋井市史』で推計した数値とピタリと合致する。このことから逆算して、全国推計と対照させた時、男子合計 9,528 名のうち約 20%にあたる 1,900 名が応召したものとみられる。よく知られている通り、兵士として動員された正確な数字は全国的にも地域的にも今もって得ることはできない。それにしても 5 世帯に 1 つは、一家の働き手、あるいは若者を亡くしてしまったことのもつ意味は大きい。

次に堀之内町に限定して戦病死者の原因別を見ると、戦病死者合計 137 名のうち、65.7%は戦死、29.9%は戦病死である。戦わずしてマラリアなどの疾病や「満州」の極寒の大地で凍傷に陥ったものが含まれる。ほかに病死が 3.6%であるが、これは戦地で病を得て、中途帰還して本土の病院で亡くなった場合などである。

また、病死者 45 名の落命した場所を見ると中国本土のみで 39.9%、満州・ソ連を加えると 55.5%にも及んでいる。ついでフィリピン等の 31.1%であった。戦病死者 136 名（1 名はその事情により除外）の職業上の地位などをみると、伍長・兵長・上等兵で 66%に及び、ついで軍属が 10%弱であった。当然のことと

はいえ、地位の低い、つまり専門的職業人でない兵士や軍属、看護婦などの犠牲の上に戦争が進行したことを示している。

続いて総括的に犠牲者たちの時期と犠牲になった場所をみておく。まず時期であるが、終戦 1 年前の 1944（昭和 19）年、マリアナ失陥、サイパン島陥落、レイテ沖海戦と、敗色が濃い戦闘が行われ、この時期に全犠牲者の 36%が集中している。

次に 1945（昭和 20）年、終戦までの 8 ケ月半で全犠牲の 28.5%が占められている。フィリピンでの日米対決と沖縄戦、ビルマそれに中国東北部（「満州」）での崩壊、これらが主な戦場となった。

この年の 4 月、沖縄に上陸した米軍との白兵戦は 6 月 23 日までの死闘として展開し、アメリカ側も多くの犠牲を伴ったが、何よりも日本軍の一般市民に紛れ込んでのゲリラ的戦争行動は、沖縄県民 90 万のうち 20 万にも及ぶ犠牲とひきかえられたのである。

次に犠牲になった場所の合計数字でとらえると、ソ連の 2 名を含む中国 42 名（31%）、ついでフィリピン 30 名（22%）、ビルマ 9 名(7%)、沖縄 5 名（4%）であり、本土の 12 名（9%）は、戦場でのことではなく、病死と豊川海軍工廠に徴用されていた女学生などであった。

こうした犠牲となった場所の比重は、十五年戦争の主戦場がどこにあったかを如実に語る。第一にそれは中国であり、第二にそれはフィリピンであった。

このように旧菊川町という地域ひとつを見ても、戦争による戦死者数等を確認することができ、詳細に調べることによってその実態に迫ることができる。

◎スライド No. 33

「戦捷の提灯行列・旗行列」【佐々木古櫻戦中画便り】

1942 年 2 月 15 日､イギリスの東アジアの牙城であるシンガポールが陥落した。当時難攻不落といわれたこの要塞が陥落し、またイギリス海軍の戦艦プリンスオブウェールズや巡洋戦艦レパルスも撃沈した。これを祝して沼津でも旗行列が行われた。その時の様子を描いている。その後戦局は悪化の一途をたどり、佐々木古櫻氏が敵撃滅の提灯行列を見ることはついに叶わなかった。

<画中に記されている文字>

●二月十八日、全国民は戦捷祝賀の旗行列。沼津市民は中学校々庭に集り、正午万歳を三唱、市内を行進、学校生徒は市内を旗行列をした。(真中・下段)

●今に比島（フィリピン）の敵撃滅の提灯行列をする日も近からん。それまでは国民は総力増産に励め。(左・下)

●前戦に補給だ。一機でも多く飛行機を送れ。(真中・左)

●（後筆）夢であった。夢であった。夢でもよい、見たかった。

後記（真中・上段）

- （後筆）提灯行列、旗行列、一生の内に戦捷の行列を見ることが出来ないのが残念で残念でたまらない。後記(右下段)
- （後筆）死んだらせめて画でもよいから見せてくれ。子供等は見たことがなかったが、提灯行列は愉快なものだ。後筆（左上段）

◎スライド No. 34

研究の手引き（参考資料）

- 『静岡県史』通史編６　近現代二
  「第１編　満州事変期の地域社会と経済発展」
  「第２編　翼賛政治と戦時統制」
- 『図説静岡県史』第５章 近代
  24　大空襲　　一九四五年夏
  25　本土決戦態勢　県下の軍事施設
- 「太平洋戦争開戦を伝える記事」『静岡新聞』静岡県立中央図書館
- 「海から引き揚げられた海竜」　熱海市立図書館
- 「トーチカ」　歴史文化情報センター
- 『静岡県の戦争遺跡を歩く』　静岡新聞社
- 「浜松艦砲射撃の新聞記事」　中日新聞社
- 「清水の艦砲射撃」　静岡平和資料センター
- 『ハルヲの戦争－清水艦砲射撃』渡邊晴郎　著
- 「警報告知板」　静岡平和資料センター

◎スライド No. 35

研究の手引き（参考資料）

- 『佐々木古櫻　戦中画日記』　沼津市歴史民俗資料館
- 『佐々木古櫻　戦中画便り』　沼津市歴史民俗資料館
- 「沼津大空襲」　沼津市明治史料館
- 「浜松　空中戦で B29 撃墜」　浜松市立中央図書館
- 「浜松　敵機来襲」　浜松市立中央図書館
- 「浜松市　楊子橋に残る弾痕」　歴史文化情報センター
- 「浜松空襲　炎上する浜松市街」浜松市立中央図書館
- 「浜松大空襲後の市街地」　浜松復興記念館
- 「投下された焼夷弾の残骸」　静岡平和資料センター
- 「B29　跳梁」　静岡平和資料センター
- 「束になって落ちる焼夷弾」　静岡平和資料センター

- 「静岡が燃える」　　静岡平和資料センター
- 「逃げまどう」　　静岡平和資料センター
- 「静岡大空襲」の市街地　　個人所蔵

◎スライド No. 36

研究の手引き（参考資料）

- 「焼け残った不去来庵」　　歴史文化情報センター
- 「阿弥陀如来の涙」　　歴史文化情報センター
- 「復興のシンボルツリー」　　歴史文化情報センター
- 「ポツダム宣言受諾を伝える新聞記事」
  『静岡新聞』静岡県立中央図書館
- 『菊川町史』近現代通史編　　菊川町史編さん委員会
- 『浜松大空襲　戦争はいらない』元城校十九年会編集委員会
- 『わたしのえにっき　戦時下の浜松にて』
  清野泰子　著
- 『日本史大事典』　　平凡社
- 『国史大辞典』　　吉川弘文館